

# しあわせ日記



社会福祉法人 十字の園



---

# はじめに

---



## ～ しあわせ日記について ～

今回このしあわせ日記が発行される事になった事を大変うれしく思います。

各施設の素敵なエピソードをお読みいただく前にこの冊子について説明させていただきます。2020年4月より法人介護部会が発足され、十字の園のケアとはどういうものなのか？理念に沿ったケアは何なのかを考え話し合ってきました。そして職員一人一人にわかりやすく伝えていくためにどんな働きかけが必要なのか考えてきました。

時には沈黙になる事も・・・。

「何を大切にしてきたんだろうか」

「利用者さんの生活を守る。って事？」

「生活を守るって何？」など・・・。

そんな時、メンバー一人一人からご利用者の思いを汲み取った際に起きた素敵なエピソードが分かち合われ、こんなことあった、あんなことも。それはとても感動するひと時でした。

その中で「こういう話をそのまま分かち合って伝えましょう。」とメンバーでひとつの気持ちになっていきました。十字の園に労する多くの職員にも伝え、思いを共有しよう。さてどのようにして？ 一つの手段が冊子作成配布でした。

それは私たちの大先輩である 林 富美子先生（御殿場十字の園の初代医師）が残された「夕暮れになっても光はある」にならうものでもありました。林先生も当時もしかしたら十字の園のケアを何とか伝えていこうと本を出版されたのかもしれないと思いをはせながら。

今回十字の園職員一人一人が「しあわせ日記」を手にとって、遠い昔の話ではなく、今現在私たちの前で繰り広げられる素晴らしいケア、そしてそこで涙し、笑ったり葛藤したりの出来事を分かち合う事でケアに向かう力の一助になる事ができ、さらに多くの素晴らしい事が起こるきっかけになるのであれば非常に幸いと思います。これからも皆で大切にしてきた事を大切にしたいと思っています。

---

≡ ≡ ≡      目 次      ≡ ≡ ≡

- わたしのねがい  
伊豆高原十字の園 ..... P1
  - 新聞に載っていた景色を見に行こう  
松崎十字の園 ..... P7
  - おうちに帰りたい  
御殿場十字の園 ..... P13
  - 太郎さんの願い  
浜松十字の園 ..... P19
-



# わたしのねがい

伊豆高原十字の園



今年102歳になるIさんは

「お家に帰りたいたい」と

まいにち、まいにち

3階から1階へ何往復もされています

十字の園にきて5年

その前の施設で5年

かれこれ10年おうちに帰っていません

(何度か伺っているも忘れてしまいます)





ご家族と相談し

さくらが散り始めた4月初旬

お家に帰ることになりました

Iさんのお家は海のまん前であることしか  
付き添う職員はお家の場所を知りません

本人の道案内で出発！

10年の月日で、景色が変わり戸惑っていると  
息子さんが外で待っていてくれました。

でも、お家の前に着くと

喜んでくれると思っていたのに

浮かない表情をするIさん

Iさんが覚えていたお家は昔のお家で

建て替えて住んでいたお家は

忘れてしまっていたのです。

周りの景色も変わってしまい、戸惑うばかり

そんな中、ご近所さんがひとり、ふたり

久しぶりに会えたことで涙ぐまれるIさん







20年、生活をしてきたお部屋は  
すっかり忘れてしまっていたけれど  
ご主人にお線香をあげることができて  
ご近所さんと昔話ができる

家の前の変わらない海を見ることができて  
あっという間の時間でしたが  
喜んでもらうことができて本当によかった

午後には、いつものように  
3階から1階へ「お家にはいつ帰れるの」と  
何往復もするIさんです。

# 伝えたいこと

## 伊豆高原十字の園

毎日同じように繰り返し訴えていることに対し、行っても直ぐに忘れてしまうから・・・家族も迷惑だろうと、勝手に解釈し業務優先で入居者の思いをくみ取ることが出来ていなかった。

全ての入居者に対し思いをくみ取るとはなかなかできないけれど、できることは、たとえ忘れてしまったとしても、その瞬間がその方にとって有意義な時間となればとの思いからご家族に申し出たところ、快く協力していただけることとなり、「お家に帰ろう」となりました。

短い滞在期間でしたが、その瞬間は輝いていて、本当にうれしそうにされていたので、同行した自分も、「ああ、連れてきてあげてよかった」と思いました。

---

### 後日談として

このことがきっかけであったかわかりませんが、ご家族よりご主人の法要に参加させたいとの申し出があり、法要にも参加することができました。

# 新聞に載っていた 景色を見に行こう

松崎十字の園



ある日の夕方、ある利用者様が新聞をもってきて「ねえねえ、此処はどこ?」と尋ねてきました。場所は西伊豆町の黄金崎。松崎十字の園から車で十分ぐらいのところですよ。



この利用者様は数日前に息子様がお亡くなりになっていきます。横浜の息子のところに行くのに通らなかつたから、と話されてきました。そこから息子様との思い出話となり、「綺麗な所ね・・・」と感慨深そうに言われました。これは、もう明日行くしかない!と思います、その日のうちに計画を練りました。

翌朝「昨日の新聞のところに行きませんか？」と声をかけると、とても喜ばれていました。ここ数日は冬に戻ったかのように寒い日が続きましたが散ってしまうのでは、と思われる天気でしたがこの日を境に春本番の気候になり、絶好の外出日和になりました。



外出までの間、よそ着に着替えたり、準備万端、車内でも歓喜の声を挙げられていました。目的地に着くまで行った事の無い場所まで案内し、帰りには声が枯れるほど喜んでいただけました。

喜ぶ顔を隣で見て、私自身もとても大きな力をもらいました。  
何気なく言った一言、何気ない表情の変化、一つでも多く叶えたい、再びそう思うような関わり合いになりました。  
素敵な時間を過ごせたことに感謝します。



# 伝えたいこと

## 松崎十字の園

新聞の記事を持ってきて、「ねえねえ、ここはどこかしら？ 綺麗な所ね、」と言われた一言から始まった出来事です。

私たちは、何気なく言われた一言、その時の表情、を大事にしています。私自身にとっては普段何気なく見ていた景色ですが、お一人お一人にとってはそれぞれの思い出がたくさん詰まっているものだなあ、と再度実感させていただく関わりになりました。

また、今一度、「当たり前前の生活ってなんだろう」「日常生活、日常生活支援というけれど、一人一人にとっての日常とは何だろう」とその後の関わりにも繋がる出来事でした。100歳を迎えた利用者様でしたが、目的地までの道中は横浜に住む息子様の家に行っていたときに通った道や、行った事の無い場所、行きたかった場所を案内しながら目的地まで向かいました。

### 後日談・・・

今年の4月に入った際にその利用者様から、「あなたと去年行ったあの場所、裏山のあたりも花が綺麗だったわね」と声をかけられたので、計画を練りました。意識はしていなかったのですが、外出したのは昨年と同様の4月5日でした。今年には新卒で入った職員さんと一緒に出掛けましたが、とても良い思い出になっていただけたようです。今年は利用者様からのお誘いになったので、来年はこちらからお誘いしたいと思います。





# おうちに帰りたい

御殿場十字の園



「おうちに帰りたい。おうちに帰りたい」と悲しそうな顔をしながら言い続ける Yさんというおばあちゃんがいました。どんなに職員がなだめてもその顔はなかなか晴れる事がありません。ほんの少し笑ってもすぐに悲しい顔になってしまいます。



そんなある日、Yさんの生きてきた  
生涯を知りました。  
Yさんは幼い日にお母さんを亡くし、  
やがて家族と離れる事になり、  
たったひとりで遠い親類の所へ  
預けられたのでした。



「おうちへ帰りたい。おうちに帰りたい。」  
まだ親に甘えたい盛りに住んできた家と  
家族と離れ離れになったさみしさはどれほど  
であったか。そのさみしかった思いが、その  
言葉になっているのかもしれない。  
どうしたらよいかわからないけれど、Yさんの  
その言葉をそっと心を重ね合わせながら聴く  
ことにしました。



# 伝えたいこと

## 御殿場十字の園

私たち職員とご利用者との出会いは当然のことながら高齢期になってからです。時にはなぜだろうかという言葉や行動が見える時があり、それに戸惑う事もありました。

しかしながらその方の人生をさかのぼり、ひも解いていくとき発する言葉の意味や、その時の感情が今も脈々と生き続けている事がわかります。日々の関わりの中でご利用者の心の中に渦巻いている悲しみや涙に寄り添いたいという思いを持ちながら関わる事の大切さをこのご利用者さんとの関わりの中で教えられました。

良い言葉かけ、良い関わり方とは何か、十字の園が受け継いできた関わり方とは何かを考える時、形だけの関わりではなく、その方を心から理解し受け入れた人が関わる関わり方なのではないかと思わされたのです。

そんな事に思いをはせていた時にこのしあわせ日記を作る事になり、その方の身近にいた職員に挿し絵を描いて頂く形にしてこのエピソードを選びました。



# 太郎さんの願い

浜松十字の園



## 太郎さんの願い

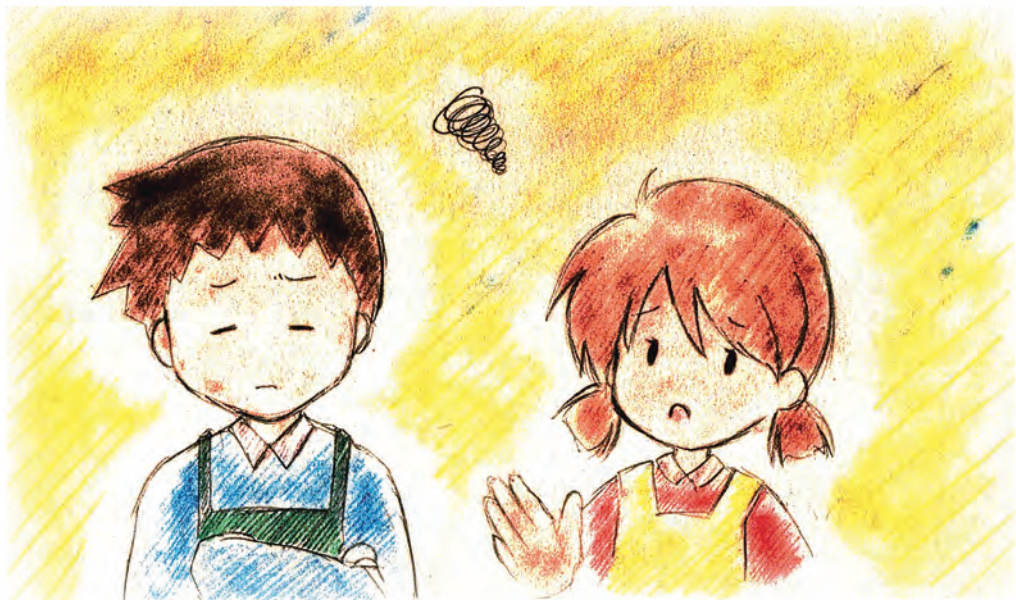
太郎さんは食べることが大好きな人でした。中でも、汁粉やプリンといった甘いものが大好きでした。そんな太郎さんでしたが、体力が落ち少しずつ食べることができなくなりました。それでも太郎さんの願いは「うまいもん食べたい」「汁粉が食べたい」でした。





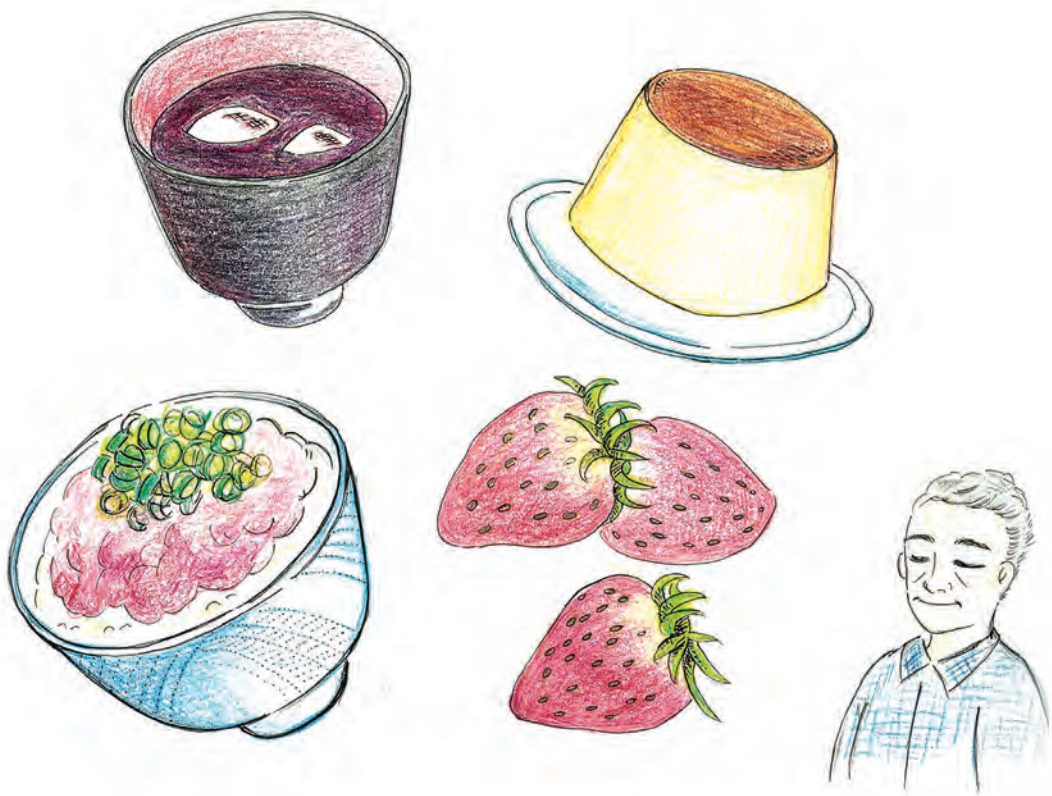
## 寄り添う

太郎さんの願いを聞いた職員は、皆で集まり考えました。太郎さんは、食えることが何より大好きな人だから、願いを叶えてあげよう。熱が出ることがあっても本人と家族の思いに寄り添ってあげたいと考える職員がいました。



## 好きな食べ物

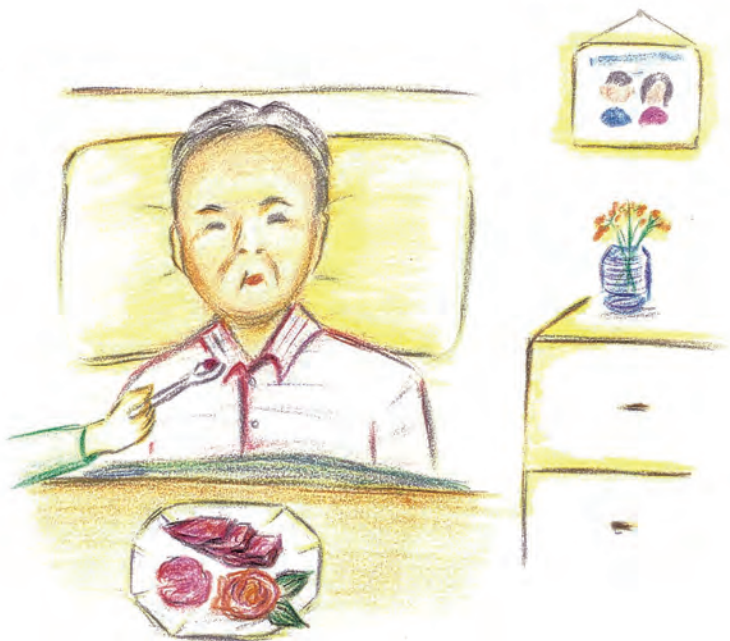
職員みんなで話し合い、太郎さんの好きなものを食べてもらおうということになりました。  
太郎さんは思いました。「イチゴも食べたい、プリンも食べたい、好きなものをたくさん食べたい」と。



## 願いを叶える

ある日、太郎さんは言いました。「カツオの刺身が食べたい」と。それを聞いた職員は思いました。「ぜひ食べさせてあげたい」と。すぐに職員はみんなで集まり話し合いをし、家族にも相談しました。

家族も同じ思いでいたため、すぐにカツオのお刺身を用意してくれました。夕食にカツオのお刺身を見せると、太郎さんは嬉しそうにされていました。そして、おいしそうにカツオのお刺身を食べました。



## 家族の思い

太郎さんが、最後まで好きな物を食べて過ごせたことに、家族は「食べたい物を食べさせてもらえて良かったです」「悔いが残らない濃厚な時間が過ごせました」と感謝の言葉を職員にかけてくれました。



## 思いを大切に

太郎さんとご家族が教えてくれました。

その人の思いを大切にし、笑顔にすることで周りも同じように笑顔になり幸せを感じると。

これからも、たくさん笑顔が見られるよう「笑顔の種」をまいていきたいと思います。



# 伝えたいこと

## 浜松十字の園

エピソードで紹介したご利用者は誤嚥性肺炎で入院し退院後はゼリー食と点滴で生活されていましたが、嚥下が困難になりすぐに看取りとなりました。

普段は寡黙な方でご本人の思いをくみとることが中々難しい方でしたが、ある日、ぽつりと言葉にした「甘いものが食べたい。」「好きなものが食べたい。」を職員が聞き、『ご利用者の最期の時まで自分たちに何が出来るのか』を考え、ご家族や多職種に相談し、皆で一緒に同じ思いで支援を行うことができました。

カツオのお刺身をご家族に用意してもらい、夕食で召し上がった時の嬉しそうな笑顔がとても印象的でした。

普段どうしてもご利用者の身体状況で食事形態等を考えしまうことが多いですが、ご利用者の思いをくみ取ったことで、ご利用者の笑顔がみられ、職員も達成感を感じることができました。

今後も、『やってよかった』と思える支援を増やしていきたいと思えます。

# 終わりに

みなさま、しあわせ日記はいかがでしたか？

これは、十字の園の職員が日頃大切にしている思いを、ご利用者のお一人お一人の希望に向かって心を合わせながら一つ一つ紡いだ物語です。

1960年に認可を受け当時高齢者を支える法律の無い中で、一人孤独の中に過ごされる寝たきりの高齢の方に出会った、ドイツ人ディアコニッセ ハニ・ウォルフさんは、その方々の悲しみを私の悲しみに、苦しみを私の苦しみとして受け止め、その方々が神様のもとで過ごし、悲しみが喜びに、苦しみが希望に変わり、神様の愛による園をと、思いを同じくする仲間と、一緒に十字架の元に集い憩う十字の園が造られました。

今回紹介させていただいた物語は、日々成長するご利用者の希望の花に、ご家族はじめ職員がその花の一つ一つの咲く喜びに満たされたものです。それは、今この時もあちこちで希望の花が咲いています。

これからも皆様と一緒に希望の花が咲く十字の園の物語を紡いでまいりたいと思います。

冊子作製にあたり、思いを聞き取り、言葉に紡ぐためにご尽力くださった介護部会の皆様、編集、発行にあたり労してくださったアド・アール株式会社の皆様はじめ携わってくださった皆様に心から感謝を申し上げます。

次に皆様にお届けできる時を楽しみにしながら

2024年 3月

社会福祉法人 十字の園  
理事長 鈴木 淳司



## しあわせ日記

---

発行日：2024年3月

発行者：社会福祉法人 十字の園

静岡県浜松市浜名区細江町中川7220-11

編集：しあわせ日記制作委員会

連絡先：053-414-1400

印刷所：アド・アール株式会社

---